

拝復

残暑お見舞い申し上げます。

先日は、私の質問に丁寧にお答えいただきありがとうございました。そのお答えの中に、「意見等に対しそれぞれの人がそれぞれの意見等を述べる機会を残したい」との記述がありましたので、今回は私たち「石岡繁雄の志を伝える会」の意見を述べさせていただきます。この会には、顧問として石原國利様、会員として相田武男様も入会していただいていることを明記いたします。

○ 貴信 1. について

最後に記させていただきます。

○ 貴信 2. ① B ① について

石原國利様にお会いして（本年六月四日）詳細を聞き、また電話（八月十二日）でも、再度確認したところ、平成二十三年の四日市都ホテルでの会談では、「高井君と湯浅君からの突然の話にビックリして、きちんと対応できなかったかも知れないが、はっきりと間違っている部分を答えた」と話されました。

平成二十四年二月のまるは寿司での会談の際の石原様、澤田榮介様の言動についても、話を聞いております。澤田様の証言は、「平成二十四年二月九日付、澤田榮介氏来訪（あづみメモ）」に記してありましたので、転記します。

十一時四十分に澤田氏突然来訪あり。

湯浅氏から集合がかかり、十二時半からまるは寿司で会うことになった。石原國利氏が大阪出張のため出向いているのでこの日になった。

「湯浅氏が突然訪ねてみえ、この冊子を受け取った。これに付いて今日話し合いがもたれる」と言われ（澤田氏は顔面蒼白で手が小刻みに震えていた）冊子を見せて「これの内容があまりにも酷いので、僕は断固抗議します」とのこと。内容について少し質疑応答し、あまりのことに私は「この文章が出されたら、父の名誉毀損で告訴します」と話した。

十二時十分頃、澤田氏は冊子を置いて出掛けられ、その間に、冊子と、澤田氏の意見の書かれたメモと、澤田氏から依頼のあった「奥又白谷備忘録」のコピーを取っておく約束をし、終わり次第、石岡宅に会談の結果報告に来てくださることになった。

十五時澤田氏戻られる。話し合いの結果。

高井氏も来ての話し合いだった。「僕は猛烈に批判したところ、湯浅は『冊子の公表はしない。全て破棄するのでお返し願いたい』ということになった。國ちゃんは『事実だけをまとめて総括はすべきです』と言われた。高井さんはそれでも不満の様子であった。あの冊子は高井さんが湯浅に書かせた物と思われる。事実をゆがめて自分の思う方向に捻じ曲げた愚劣極まりない作文で、こんな物が出されたら岩稜会の恥です」と話された。その時点で私はまだ冊子をしっかりと読んでいなかった。澤田氏は「出さないと言うことですから、腹が立つからあな

たは読まない方が良いでしょう。」と言われた。

今年七月十六日に澤田様宅を訪問して、お話を聞いたところ、この時にお話くださった内容と同様のことをお話しくださいました。

私たちが取材しました石原様（令和元年六月四日面談、八月十二日お電話）と澤田様（平成二十四年二月九日面談と澤田様筆のメモ、令和元年七月十六日面談）の証言と、私が関与している部分についての証言を合わせて、箇条書きで記します。

（ア）「奥又合宿備忘録」について

備忘録は遭難事故直後、情報が錯綜する混乱状況の中で書かれたメモや伝聞をもとに上田定男様らが書いたと思われる。内容に関して、証言者への確認や正確さの検証がないため誤りが多く、父が当時の「混乱ぶりを伝える資料」として保管していたものです。後に、私が岩稜会の会合の場で誰が書かれたのか確かめるために持参いたしました。それをもって湯浅様は「五十年経った今、なぜ見つかったか」と記述してみえますが、もし隠しておくべきものであったなら会合の場で公開したり岩稜会員に尋ねたりするはずがありません。

（イ）遭難の総括がされなかったことについて

石原様の証言によりますと「岩稜会としての総括・検証は、人命にかかわるナイロンザイル事件が最優先されていたためなされなかった。高井君はその時、四峰初登攀をする予定だったが、それも取りやめとなり、遭難救助に狩り出されたし、岩稜会の登山行為が抑えられたため不満が残った。

湯浅検証（平成二十三年十一月付の湯浅様執筆の冊子）は高井君だけの意見であり、岩稜会の公式見解ではない。この文章が書かれたことで、高井君は言いたいことを言えてすっきりしたのではないか。しかしこう言う意見が出された以上、中澤さん・森泰造さん・佐野さん（冷静な判断が出来る少数の方々）にだけ湯浅検証を見せて、これを踏まえて筋の通る所だけを取り上げて、岩稜会としての前穂高遭難の総括をした方が良いと思う」（平成二十四年三月十五日電話）とお答えになりました。

石原様のお話のように、前穂高遭難事故後に遭難の総括がなされなかったのは、それよりも大きな「ナイロンザイル事件」問題が起きたためです。当時、未熟な登山が遭難の原因だとする批判が篠田軍治氏から出ており、中傷によってナイロンザイルそのものの問題がうやむやにされる恐れがありました。実際、ナイロンザイル切断による事故が相次いだ時期であり、登山者の命を守るためのザイルの強度について真相を明らかにすることの方が優先されました。この「ナイロンザイル事件」が決着をみるまでには、二十年を要しましたことは湯浅様もご存知のとおりです。

高井様は、遭難事故が起きたことでご自分が挑戦するはずであった「前穂高岳四峰正面北条・新村ルート」初登攀が取り止めとなり、さらにナイロンザイル事件のために登山活動が抑えられていた岩稜会に不満を募らせてみえたこと、「自分は名アルピニストになるはずだったが、あの遭難のお蔭でなることができなかった」という事

を、平成十六年六月十日に拙宅に来訪された高井様から、私は直接聞いています（父が就寝のため座を外した後、お酒のお相手をしている時に）。

それに関連して、高井様がナイロンザイル事件関係の仕事に協力しないばかりか、父を執拗に責め立てていたと、岩稜会会員の一部の皆様の記憶に刻まれています。

登山家としては優秀であった高井様に心酔していらっしやっただと思われる湯浅様は、高井様の思いに寄り添う本書を刊行されたのであらうと思います。しかしながらその想いは、捏造や他の関係者の犠牲の上になさるべきではないと存じます。

（ウ）チーフリーダーの指示の有無について

湯浅様は高井様の推測を裏づけるものとして、誤りの多い「奥又合宿備忘録」のみを正としてみえますが、その中にも「指示」についての記述はありません。同録の「引き返すことになっていた」は誰の言か不明です。

澤田様はチーフリーダーの指示について、「明確な指示、ミーティングともになく、行動は現場判断で決め、指示違反はない」と述べられています。また、石原様も「明確なものではなかった。前進か引き返すかは現場の状況判断が優先されなければならない。私たちは引き返すことの危険と登攀を続けることの危険を比較し、登攀する方が安全という結論になった」と同様のことを述べています。

湯浅様は、昭和三十四年に岩稜会入会とのことですので、その当時の山の現場における現実をご存じないと澤田様から伺っております。そのため、現実にはそぐわない推測を根拠としていと言わざるを得ません。なお、平

成十八年五月七日の石岡・高井会談を拠り所に「石岡はこの『指示』の存在を認めた」とありますが、当時の父（同年八月十五日逝去）は、記憶も気力も衰え人との会話に耐えられない状態にあり信憑性に欠けます。

（エ） トップ交代について

トップの交代について、石原様は「成り行き（若山がトップ交代に即対応）」と述べてみます。澤田様は、「誰がトップに立っても危険は避けられない。その結果は全員に及ぶこと、団体であることを三人は認識していた。若山が駄目なら夏ルートで再チャレンジすべきかと考えていた」と述べています。また、五朗叔父の起用とザイル切断には因果性がありません。ナイロンザイルに従来の麻ザイルでは考えられない「鋭角の岩角での脆弱性」がなければ、叔父は墜死していません。

（オ） 「吊り上げ」の有無について

「奥又合宿備忘録」での室敏弥様談の一文を湯浅様は新事実として重要視しているが、室様は故人であり、いつ誰から聞いたのか、又聞きしたことを報告したのか、伝聞の経緯が不明です。

当事者である石原様は、「確保していただけです。『吊り上げ』は一度も起きていません。この本を見て初めて知りました。そんなこと一度も言っていないません」と明確に断言されており（令和元年六月四日）、事実として「吊り上げ」はありませんでした。

NITEの長田敏様（令和元年六月八日電話）、菊地久様は、「吊り上げても吊り上げなくても切れる」と断

言しています（令和元年六月十一日電話）。ナイロンザイルは鋭い岩角に弱く、ナイロンザイルの脆弱性こそが大事な点であるのに、湯浅様は自作の稚拙な実験によって、暗に「石原氏が若山を吊り上げたので足を滑らせ滑落させた」と言わんとする推測は論外です。

（カ）その他（一）

貴書五六頁二行目から「アルピニズムに沿ったヒマラヤ登山を目指そうとしていた私たち兄弟の動きに気づいた石岡さんは激怒し、私たち兄弟を攻撃したのです。それが『岩稜会員に告ぐ』となって出ました」

これに関しては、同封の昭和三十二年八月三十日付、石原一郎様宛、同年十月付、石原國利様宛の父からの手紙をご参照ください。「ヒマラヤの鬼がいないチームにはヒマラヤはできない」等、当時の父の石原様兄弟への接し方が理解できる手紙だと思います。このことが昭和三十三年七月十五日に出された『岩稜会員に告ぐ』につながった訳です（この手紙は私が運営していますHP「石岡繁雄の一生」にも掲載しています）。

石原様は、「そのような話を湯浅君にしたことは記憶にない」と証言してみえます。

（キ）その他（二）

HPに掲載しているNITEとの関わりについての貴書の記載事項ですが、長田敏様は大町山岳博物館から五朗叔父墜死時のナイロンザイルの貸出を受けた訳ではなく、ナイロンザイルの分析を行った訳でもありません。その担当は当時NITEの特命アドバイザーであった菊池久様で、平成二十六年四月に『氷壁』のザイルが語

るもの」として菊池様がまとめられたものを、長田様が同年十月に「あいちサイエンスフェスティバル二〇一四」さかえサイエンストーク〈製品事故の原因を探るサイエンス―『氷壁』ザイル切断事故から最前線情報まで―講師 NITE製品安全センター参事官 長田敏氏〉として発表されただけです。湯浅様が長田様の論文とおっしゃっているのは、この講演の際にパワーポイントで作成され、公開された講演資料で、私たち「伝える会」が校閲させていただきました。

尚、貴書二四八頁から二五四頁に掲載されている「文献」には、三か所でHP「石岡繁雄の一生」が挙げられています。湯浅様にHPをご覧いただいていることは有難く思いますが、HPを閲覧していただいているにも関わらず、このような間違いをされることは理解できません。

このことは、湯浅様のご本が、HPに限らず文献の中のご自分にご都合の良いところだけを取って捏造し、執筆された作文であると言えると存じます。思い込みと決めつけで父を誹謗中傷し、当事者である石原様や澤田様らを冒瀆し、岩稜会の団体としての名誉をも汚す「検証」に値しない内容となっており、看過することはできません。

○ 貴信 2. ②③④ B②③④について

「平成十八年五月七日、高井・湯浅氏来訪（あづみメモ）」をもとに述べます。

湯浅氏から電話があり、父から「高井と来るそうだよ」と聞いた。

二〇〇六年五月七日当日、二時三十分、二人がみえて、湯浅氏が「今日は手打ちで来ました」と言われ、私は意味が判らなかったが母屋の居間へお通しして、私はお茶の接待をした後、酒宴の用意のため台所へ行っていた。急な来客で、慌てて買い物に行き準備も整っていなかった。

そのため、その時の父と来客との話はほとんど聞いていないので、質疑応答についての内容の誤りなどは判らない。ただし、父はアルツハイマー等を患い正常な状態ではなく、長い話に耐えられない状態であったため、内容を判っていなかったと思われる。判らなくなると何でも「そうか」とか「分からん」と、面倒になると「分かった。分かった」と言っていた。

当時、父は最愛の母を亡くして、身体も悪く精神的にも弱くなっていた。そういう人を捕まえて、五十年以上も前の話をし詰問すること自体、常識を逸している。

その頃は父を慰めるためと母の教えを守るために、来客があると事前に分かった段階で、酒宴の用意をしていた（父は来客をととても喜び、必ず酒をお出しするように私に命じもしていた。車で来ている来客にまで酒を勧めて困ったものだった）。

「以上のことで、「石岡は座敷で酒宴の用意をして…」は事実とは異なります。しばらく話をしている間に私が座敷に酒宴の用意をして、その後呼び出したのです。高井氏が来訪された時だけ歓待されたように書かれている文章は納得がいきません。」

その後は、私も同席して接待をした。高井氏は「まさかこんな展開になるとは思ってもいなかった」と言われた。私はことの成り行きが全く分かっていなかったので不思議に思った。父は「わしが悪かった」と言っていた

が、なぜ謝らねばならないか理解出来なかった。湯浅氏は帰られる時に「これは手打ちなんだから、今後は一切この話はしません。高井さんも言いたいことは言えた訳だし、手打ちという事で来たのだから、これで一切を水に流しましょう」というようなことを言われて十九時帰られた。帰られた後で父に「お父さんは悪いことなどしてないのに、なんで謝らなければならないの」と言ったところ父は「謝つとりやせんよ」と言っていた。どういう事情か分からぬままだった。「今後一切この話はしない」と言われたので、これ以上聞く必要はないと思った。

二日後、高井氏から葉書が来た。内容は来訪時のお礼と「あのことは忘れられない」と言うようなことが書かれており、「一切を水に流す」と言ったことは嘘だったのかといぶかしく思った。父が可哀そうでその葉書を渡すことは出来なかった。「その葉書のコピーを同封いたします」

父の病状についてですが、心不全・大動脈瘤・脳梗塞・アルツハイマー・胃癌（死亡後確認）など、怖い病気を沢山抱えており、平成十七年十二月の入院から急速に弱って参りました。アルツハイマーは、母が亡くなる三年ほど前から発症して人との会話に耐えられないことがしばしばあったので、後見制を申請する予定でしたが、平成十六年に母が急死し私が鈴鹿の家に入ったので、申請はしませんでした。

○ 貴信 2. ⑤ B ⑤について

平成十八年四月十六日に湯浅様の病院をお尋ねして話したと言われる内容につきまして、同年四月十五日に倉橋様ご夫妻が来訪された時に、父から指示の話を聞いたと書かれていました。しかし、私は全く覚えがないので、

本年八月三日に倉橋様に電話してお聞きしましたところ「その頃の石岡先生宅に妻と二人で訪れたことはない。指示の話も今はじめて聞きビックリしている。先生からそんな話は聞いたことはない」と答えられました。

○ 貴信 2. ⑥ B ⑥について

本年八月十二日の石原様との電話では確かに湯浅様は「出版はしない」とは言われなかったとのことです。ただし、「出版という言葉を使っていた覚えはないが、『出さない』とはっきりと言った。内容の間違いを具体的に話したが、湯浅氏の本は自分にとって都合の良いところだけをとって作文した小説である」と答えられました。また澤田様の証言は、前記いたしました「平成二十四年二月九日付、澤田榮介氏来訪（あづみメモ）」に記されております。

○ 貴信 1. について

私たちは湯浅様のご本に実名で記載されている方々には、本が出版される前に内容について、お話があるべきだったと確信しております。それがなされなかったが故に、湯浅様が本を謹呈された方々の中にも、私たちも当然知っての上での出版であると思われる、拙宅にお問合せになる方々もいらっしゃると思います。ですから、前々回の手紙で本の謹呈先をお聞きした訳ですが、お答えをいただけませんでした。

しかし私たちとしては、このまま放置する訳には参りません。湯浅様は意見を述べることは自由だとお考えですので、謹呈されたと思われる全ての場所、人々に私たちの見解を配布させていただきます。尚、その配布文書は、

貴書の誤りをすべて列挙し根拠を挙げて訂正するものとなります。その中には、湯浅様の「吊り上げ」についての検証実験に対する、私たちの実験も含めた詳しい見解も含まれます。また、併せてHP上でも公開いたしますことを事前にお知らせいたします。

以上、長々と失礼いたしました。

残暑厳しき折、お身体ご自愛下さいませ。

拝具

令和元年八月二十二日

湯浅 美仁 様

石岡繁雄の志を伝える会

代表

石岡 あづみ 拝